

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：32508  
 研究種目：挑戦的萌芽研究  
 研究期間：2013～2015  
 課題番号：25671000  
 研究課題名（和文）認知症高齢者を介護する家族介護者の離職に関する現状分析とサポートシステムの構築  
  
 研究課題名（英文）Family caregivers leaving their jobs for cares of people with dementia at home: Study of current condition and necessary factors for support systems.  
  
 研究代表者  
 井出 訓（IDE, SATOSHI）  
  
 放送大学・教養学部・教授  
  
 研究者番号：10305922  
  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：認知症高齢者を介護する家族が介護に対するポジティブな感情を抱く経験が、仕事と介護とを両立させていく上での重要な要因となっている可能性が伺えた。特に、介護者が介護を始める以前から現在に至るまで変わらずに一貫してその人らしくあり続けられているという実感と、さらに、介護に関する様々なストレスがあっても、それを乗り越えているという克服体験としての実感が得られているということが、離職をはじめとする様々な介護上の課題に対し、ポジティブに向かう重要な要因であることが示された。これらの視点がどのようなサポートとして具体的に企業や地域において実現可能であるのかを明らかにしていくことが今後の課題である。

研究成果の概要（英文）：It seems that the experience of having positive feelings about caring is an important factor for family caregivers of people with dementia continuing both caring at home and working at jobs. Particularly, it is found that the experience of consistent feeling of being himself/herself through the time of caring, and the experience to overcome stress from caring is important for family caregivers to face various issues of caring positively, including leaving jobs. Future studies should be focused on clarifying how the support system would be implemented in a community and companies along the aspect of the findings.

研究分野：高齢者看護

キーワード：介護離職 ポジティブ感情 自己成長感 ストレス関連成長 首尾一貫性感覚 把握可能感 対処可能感 介護家族

### 1. 研究開始当初の背景

総務省就業構造基本調査によると、家族の介護や看護のために離職・転職した人は、2006年10月からの1年間で約14万4800人に上り、前年同期比で4割の増加であったことが報告されている。またそのうち、男性は約2万5600人であり、その多くが40～50代の働き盛りと言われる年代であることが多いとされている。こうした介護離職者急増の背景には、2006年に行われた介護保険法の改正により、要介護者への在宅サービスが制限されたことが影響していると指摘する声も聞かれているが、同時に、行政によるサポートや、更には退職者を生む企業側の不十分な対応もその一因と考えられている。

2005年の育児・介護休業法の改正により「労働者は、申し出ることにより、要介護状態にある対象家族1人につき、常時介護を必要とする状態ごとに1回の介護休業をすることができ」ることが示された。しかし、この制度の活用はわずか6.6%程度との報告もあり、介護をしたくても仕事を休むことができない現状があることも伺える。親や親族の介護問題は、一夜にして生じる状況ではない。離職に至るまでの間には、様々な状況の変化があり、そうしたプロセスを経て最終的に職を辞する決意を固めるに至るはずである。つまり、どのような状況を経て介護離職への決断を下していくのか、そのプロセスが明確になることで、どの段階で如何なる支援が必要となるのかを知ることができるとは思われる。また、こうしたポイントが分かることは、企業の特性上難しいと思われる支援の提供も、それぞれの企業ごとに、対象社員の状況に応じた支援の提供を可能としていくことになるだろう。しかし、こうした状況に関し、労働政策的な研究アプローチはみられるものの、当事者、更には家族介護者を支援しようとする看護、介護領域においての研究はほとんど見られていないのが現状である。

平成23年度版の高齢社会白書では、我が国の高齢化が23.3%に上昇したことを記している。また、厚生労働省は、平成22年(2010)における「認知症高齢者の日常生活自立度」以上の高齢者数が280万人であったことを発表した。こうした状況を鑑みると、家族の介護に直面する労働者は今後ますます増えていくことが予測され、介護により離職を余儀なくされる人々の数も増加していくと考えられる。介護による離職は、すなわちその家族の生活基盤を揺るがす状況を生むこととなる。家族介護者が介護の提供のために職を失ってしまう状況を明らかにし、その対応策を早急に議論していくことは、ひとつは要介護者本人の生活の質を高めることに繋がり、また介護する家族の生活を護ることもなるだろう。また、人材が流出する企業にとっても、経験を積んだ労働者の喪失を防ぐことへも繋がっていくことになると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究では、認知症の人を抱える家族介護者が、その介護のために勤めている仕事を辞めなければならない介護離職の現状を明らかにするとともに、家族、地域、企業の連携による将来的なサポートシステムの構築に向けた示唆を得る事を目的とした。特に、どのような状況から最終的な離職という選択がなされていくのかといった、離職に至る家族介護者側のプロセスを明確にしていくこと、また、そうしたプロセスの中で、当事者、家族が何を必要とし、それに対し地域、行政、また企業からのいかなるサポートを必要としているのかに関する今後の課題の明確化を行い、将来的な介護を理由とした離職に関するサポートシステムの構築に向けた知見を得ていくことに焦点を当てた。

### 3. 研究の方法

(1)1年目は、介護離職に至るプロセスの明確化をはかるため、まず介護離職を経験した方がたへの聞き取り調査を行い、その内容分析を行った。また、要介護家族、特に介護を要する認知症の人を家族に有しているが介護離職には至っていない企業社員を対象に、今までの状況、現在の状況、さらに今後予測される状況など、介護に関する状況変化の聞き取り調査を行い、前者との比較からいかなる状況によって介護離職が起こりうるのか、そのプロセスをインタビュー内容から分析し、明らかにしていくこととした。

(2)2年目においては、(1)の聞き取り調査で得られた結果をもとに、介護家族を対象にアンケート調査を行った。この調査では、介護家族が介護経験から抱くポジティブな感情に着目し、どのような時に介護家族は「介護をしていて良かった」といったようなポジティブな感情を抱くのかを、A県の認知症家族会会員のうち、現在認知症の人を介護する家族500名を対象に行った介護環境に関する調査(2012年第13回日本認知症ケア学会にて発表)から、介護に関するプラス感情に影響を与える要因に着目し再分析を行った。

(3)3年目においては、本研究の最終段階として、(2)で行った介護経験から得られるポジティブ感情に関する調査結果を踏まえ、認知症と生きる人を介護する家族が、介護というストレスフルな経験からどのような内的変化を起こしているのか、その実情を自己成長感というポジティブな変化の視点から捉えていく調査を行った。

B県の認知症家族会登録会員のうち、認知症を生きる人の介護経験がある家族500名を対象にアンケート調査を行った。調査項目は、基本属性のほか、自己成長感の測定として「ストレス関連成長(SRG)尺度」、ストレス対処力の測定として「首尾一貫感覚(SOC-13)尺度」を用い、その他の影響要因として「一般性自己効力感(GSE)」、「自己健康感(MHI)」の調査を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) インタビュー調査

インタビューの結果からまず明らかとなったことは、介護を理由に離職を経験した者も、また離職せずに仕事を継続している者でも、それぞれの家族が抱えている状況は様々であり、またその状況に関係する要因は広く多岐にわたっており、家族に共通する要因や特徴を導き出していくことが非常に困難であるということであった。しかしその中で、家族が離職という判断に至る経過に大きな影響を与えている可能性がある一要因に着目し、さらなる調査分析を進めていくことで、支援に向けたより明確な示唆を得ることが可能となるのではないかと考えられた。その要因とは、介護家族が抱くポジティブな感情であった。

介護離職に関するインタビュー調査の分析を進める中で、介護に関して似たような同じ状況にある家族であっても、仕事を辞める決断を下す家族と、辞めないで介護を続ける家族とがいることがわかってきた。また、介護や仕事に関して似たような状況に置かれていたとしても、介護に対して抱く思いはそれぞれに異なっていること、また異なる思いを抱かせるに至る特有の状況があることもわかってきた。すなわち、認知症高齢者への介護が仕事を圧迫し始める状況に置かれた時においても、その家族が介護に対してどのような捉え方をしているのか、できているのかによって、その後の状況に対する対応や経緯に大きな違いが現れてきている可能性が考えられたのである。そして、その中で家族が介護に対してポジティブな感情を抱いていることが、離職を含むその後の状況判断に際し、ポジティブな影響を与えているように考えられたのである。

そこで、次年度においては、認知症高齢者を介護する家族が、介護を通じて実際にポジティブな感情を抱くことがあるのか、またどのような時に家族は、「介護をしていて良かった」といった感情を抱くのかを調査し、分析を行うこととした。

##### (2) アンケート調査

アンケート対象者は289名(男59、女227、不明3)であり、平均年齢は65.4±11.2歳、平均介護歴は6.7±5.3年であった。

「介護をしていてうれしいと感じることがあるか」という問いに対し、〈ある〉と回答したのが134名(47.5%)名、〈ない〉との回答が82名(29%)であり、介護経験においてポジティブな感情を抱くことが〈ある〉との回答が〈ない〉を上回る結果となった。また、「うれしいと感じる時はどのような時か」との問いに対しては、「笑顔や嬉しそうなお表情、しぐさなどの喜びの反応が見られたとき」との回答がもっとも多く59名であり、「ありがとうなど、感謝や労いの言葉が聞かれたとき」との回答が25名と次に多い結果となった。

#### Q「介護をしていてうれしいと感じることがあるか」

〈ある〉 : 62名(21.5%)  
 〈たまにある〉 : 72名(24.9%)  
 〈ない〉 : 30名(10.4%)  
 〈あまりない〉 : 52名(18.0%)  
 〈どちらとも言えない〉 : 66名(22.8%) 欠損値 : 7(2.4%)

約半数近くの対象者は、介護をしていてうれしいと感じるような、プラス感情を抱く経験をしており、その多くは、被介護者からの笑顔やねぎらいの言葉など、介護者への介護に対するプラスの反応を感じる時である事がわかった。認知症の進行に伴いそうした反応が得られ難くなっていった時に、家族が介護に対するネガティブな思いを膨らませてしまう可能性が考えられた。

さらに、「介護をしていてうれしいと感じるか」との問いに対する回答は「介護を手伝ってくれる人がいるか」(p=0.012)、「近隣に見守りなどを依頼できる人がいるか」(p=0.005)を除き、その他の介護環境の違いでは有意な差は現れなかった。

##### 介護環境の違いに見るプラス感情

・介護に関して相談できる人がいるか	ns
・認知症の人と同居しているか	ns
・介護を手伝ってくれる人がいるか	p=0.012
・介護者自身の健康に不安や問題があるか	
・介護に関して困っている事があるか	ns
・介護保険サービスを利用しているか	p=0.033
・介護保険外のサービスを利用しているか	
・介護のために自分の時間が持てないと感じるか	
・本人は一人で外出できるか	ns
・本人は一人で留守番ができるか	
・近くに気軽に見守りを頼める人がいるか	p=0.005
・地域に認知症の人が安心して利用できる施設があるか	ns

また、有意差を生じた2項目では、手伝いをしてくれる人、見守りをしてくれる人がいるか・いないかの違いが、うれしさを感じる事がないというマイナス感情を高める要因として影響を与えている事が明らかとなった。

うれしいと感じることがあるか	介護手伝い		合計
	なし	あり	
ある	22.9 期待度数 36.1% 調整済み残差 -3	39 38.1 63.9% -3	61 61.0 100.0%
たまにある	18 期待度数 25.1% 調整済み残差 -2.1	49 41.9 73.1% 2.1	67 67.0 100.0%
どちらとも言えない	21 期待度数 32.8% 調整済み残差 -9	43 40.0 67.2% -9	64 64.0 100.0%
あまりない	22 期待度数 43.1% 調整済み残差 -9	29 31.9 56.9% -9	51 51.0 100.0%
ない	19 期待度数 65.5% 調整済み残差 3.3	10 18.1 34.5% -3.3	29 29.0 100.0%
合計	102	170	272

χ<sup>2</sup>値:14.29, 自由度=4, p=.006

うれしさを感ずる時	見守り		合計
	9-3	あり	
ある	51 期待度数 56.7% 調整済み残差 1.8	25 19.3 44.6% 1.8	56 65.0 100.0%
5-たまにある	44 期待度数 64.7% 調整済み残差 -2	24 25.5 55.3% -2	68 68.0 100.0%
8-6-ら7-も言えない	19 期待度数 57.9% 調整済み残差 1.4	24 19.7 42.1% 1.4	57 57.0 100.0%
あまりない	17 期待度数 74.0% 調整済み残差 1.4	15 17.2 28.0% 1.4	50 50.0 100.0%
9-	24 期待度数 88.9% 調整済み残差 2.7	3 9.3 11.1% 2.7	27 27.0 100.0%
合計	169	89	258

χ<sup>2</sup>値:12.16, 自由度=4, p=.006

このことは、辛く大変な介護の日々の中でもプラス感情を抱く経験は介護環境にそれほど左右されない一方、見守りや介護の手伝いといった日常生活上のサポートが十分に得られないと、ポジティブな思いを抱く経験を妨げる可能性が高まることを示していると考えられた。

### (3) アンケート調査

アンケート調査の結果から、介護家族の約半数が「介護をしていてうれしいと感じることがある」経験をしており、また、笑顔やねぎらいの言葉など、被介護者から介護者への介護に対する肯定的な反応が、介護者にうれしいというポジティブな感情を抱かせている事が明らかとなったが、それでは、介護者が抱くこうしたポジティブな感情は、介護者自身に介護を通じて何らかのポジティブな変化を生じさせているのだろうか。また、介護経験から生まれるポジティブな変化にはどのような要因がいかなる影響を与えているのだろうか。この調査では、介護者が感じる自己成長感をポジティブ変化の一指標と捉え、現在介護を行っている家族と、過去に介護をした経験がある家族の2グループ間で比較を行うことから、介護家族への支援に資する示唆を得ようと試みた。

アンケート調査の対象者数は324名であり、うち現在介護を行っている家族のグループは148名、平均年齢67.0±9歳、介護経験歴は7.6±5年であった。また、過去に介護経験がある家族のグループは159名であり、年齢は68.3±9歳、介護歴は9.0±6年であった。

ストレス関連成長尺度(SRG)の得点に見る自己成長感は、どの項目においても中央値である3.00を超えており、現在介護中の家族、過去に介護経験がある家族のどちらのグループにおいても、介護経験を通じてポジティブな変化としての自己成長感を感じていることが分かった。しかし、合計得点をグループ間比較でみると、過去介護グループの得点が有意(p=.002)に高い結果となった。さらに、得点を問いごとに見ると、6/10項目において、過去に介護経験があるグループが有意に高い得点を示していることが分かった。同じ介護経験者でも、介護の時期により自己成長感に違いがあることが明らかとなった。

〔介護経験の違いによる自己成長感の比較〕

項目		N	M	SD	p
手助けがなくても生きて...	過去	157	3.85	.700	0.017
	現在	148	3.62	.921	
口を動かさず、舌を動かさず	過去	158	3.77	.731	0.002
	現在	148	3.49	.821	
笑顔、言葉、視線で喜ぶことが	過去	157	3.32	.969	0.005
	現在	145	3.02	.901	
口を動かさず、舌を動かさず、笑顔	過去	158	3.97	.769	0.028
	現在	147	3.77	.811	
手助けがなくても生きて...	過去	158	3.84	.764	0.02
	現在	147	3.62	.855	
1日中寝てばかり、口を動かさず	過去	157	4.07	.735	0.012
	現在	148	3.83	.899	
言葉がなくても生きて...	過去	156	3.85	.804	NS
	現在	147	3.70	.887	
舌を動かさず生きて...	過去	156	3.63	.754	NS
	現在	148	3.48	.853	
笑顔がなくても生きて...、舌を動かさず	過去	157	3.61	.910	NS
	現在	147	3.42	.928	
手助けがなくても生きて...、舌を動かさず	過去	156	4.12	.703	NS
	現在	145	3.97	.837	
合計	過去	151	38.07	5.48	0.002
	現在	141	35.92	6.43	

SRGと首尾一貫性感覚(SOC-13)の関係に着目すると、介護の経験時期が違う2グループとも同様な相関関係を示していることが明らかとなった。しかし、SOC-13の3つの下位尺度(把握可能感・処理可能感・有意味感)において関係性を見てみると、過去の経験グループでは経験の意味づけ(有意味感)に自己成長感との相関が集中する傾向があるのに対し、現在経験中のグループでは、把握可能感や処理可能感とも強い関係性があることが示された。

〔介護経験別に見た自己成長感と首尾一貫性の相関〕

	SOC-13		把握可能感		処理可能感		有意味感		
	87	96	87	96	87	96	87	96	
①	r	0.344**	0.177*	0.234**	0.088	0.233**	0.025	0.406**	0.247**
	p	0.000	0.015	0.006	0.286	0.005	0.764	0.000	0.002
②	r	0.301**	0.308**	0.187*	0.155	0.215*	0.074	0.334**	0.345**
	p	0.000	0.000	0.026	0.057	0.010	0.364	0.000	0.000
③	r	0.310**	0.220**	0.215*	0.112	0.226**	0.046	0.373**	0.378**
	p	0.000	0.006	0.012	0.173	0.007	0.575	0.000	0.000
0	r	0.306**	0.202*	0.177*	0.042	0.240**	0.042	0.434**	0.407**
	p	0.000	0.012	0.020	0.610	0.004	0.611	0.000	0.000
1	r	0.357**	0.307**	0.244**	0.171*	0.204*	0.217**	0.370**	0.431**
	p	0.000	0.000	0.004	0.035	0.015	0.007	0.000	0.000
2	r	0.347**	0.260**	0.222**	0.188*	0.287**	0.134*	0.437**	0.384**
	p	0.000	0.001	0.007	0.022	0.000	0.018	0.000	0.000
3	r	0.268**	0.178*	0.112	0.118	0.177*	0.164*	0.237**	0.278**
	p	0.001	0.027	0.172	0.151	0.017	0.017	0.005	0.001
4	r	0.087	0.077	0.050	0.078	0.116	0.087	0.127	0.204*
	p	0.246	0.227	0.563	0.345	0.170	0.277	0.130	0.013
5	r	0.107	0.157	0.025	0.071	0.110	0.133	0.144*	0.264**
	p	0.177	0.051	0.775	0.267	0.173	0.104	0.022	0.001
	r	0.153	0.076	0.008	0.072	0.123	0.031	0.244**	0.172*
	p	0.070	0.238	0.927	0.263	0.146	0.710	0.004	0.018

首尾一貫性感覚に関する先行研究から、「現在自分がおかれている環境において起きている状況のある程度予測し理解出来る」とする感覚である把握可能感を向上させるには「一貫性の経験」が、そして「人生における出来事はある程度対処可能であるとみなす感覚」である処理可能感を向上させるには「適度な(乗り越えられる程度)ストレス下での克服経験」という良質な人生経験が必要であると言われている。アンケート調査において、介護に対する被介護者からの感謝や肯定的な反応が、嬉しいと感じるような介護者のポジティブな感情を引き起こしている事が明らかとなったが、このことを調査の結果と重ねてみると、介護に対する被介護者からの感謝や肯定的な反応は、介護者が介護を始める以前から現在に至るまで変わらずに一貫してその人らしくあり続けられているという実感をもたらし、また介護に関する様々なストレスを乗り越えているという克服体験としての実感を得させていると考えられた。すなわち、現在介護中の家族は、被介護者から得られる肯定的な反応によって、把握可能感や処理可能感を高めており、そのことが現在介護中の家族の成長感を強く形成する要素となっていると考えられた。現在介護中の介護者がこうした実感を得られるような支援を提供していくことが、介護者の介護に対するポジティブな感覚を生み、介護者を成長体験へと導く重要な関わりになると言えるだろう。

### (4) まとめ

介護離職に至る家族が背負っている背景はまちまちである。しかし、認知症高齢者を介護する家族の特徴を見ていくと、仕事を辞める・辞めないに関わらず、様々な状況が家



族の介護に対する思いに影響を与えており、その中でも介護に対するポジティブな感情を抱く経験があることが、仕事と介護とを両立させていく上での重要な要因となっている可能性があることが、今回の一連の調査から明らかになってきた。その中でも、介護者が介護を始める以前から現在に至るまで変わらずに一貫してその人らしくあり続けられているという実感をもつことができること。さらに、介護に関する様々なストレスがあっても、それを乗り越えているという克服体験としての実感が得られているということが、何にも増して介護に向かうポジティブな感覚を生む重要な要因であることが示された。これらのことは、認知症と生きる人を介護する家族に向けた支援の方向性として、介護・看護専門職ばかりでなく、離職を減らそうと考える企業においても、しっかりと考慮されていかなければならない視点の一つになると言えるだろう。今後は、これらの視点がどのようなサポートとして具体的に企業や地域において実現可能であるのかを明らかにしつつ、仕事を辞めるにしても続けるにしても、介護家族と認知症のご本人とが安心して暮らしていくことのできる環境やシステムを整えていくことが課題となるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

井出訓、戸ヶ里泰典、内ヶ島伸也。(2014)  
「認知症の人を介護する家族のプラス感情と介護環境との関係性」第15回日本認知症ケア学会大会。

Satoshi Ide, Taisuke Togari. "Stress Related Growth (SRG) Among Family Caregivers of people with Dementia in Japan" 29<sup>th</sup> Conference of the European Health Psychology Society. (2015).

井出訓、戸ヶ里泰典、西村敏子。(2016)  
「認知症の人を支える家族が介護経験から得る自己成長感」第17回日本認知症ケア学会大会。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

井出 訓 (IDE, Satoshi)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：10305922

##### (2) 研究分担者

戸ヶ里 泰典 (TOGARI, Taisuke)

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：20509525

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：